トンネル残土埋め立て撤回を勝ち取った豊丘村小園地区の報告
（21 総学リニア分科会での発言要旨）

桂川雅信（JSA 長野県支部幹事）

●長野県下伊那郡の飯田・下伊那地域ではリニアの残土処分量が約 950 万㎥。JR 東海はそのほとんどを「窪地」と称して周辺山地の谷に埋め立てる計画である。

●多くの関係自治体ではダンプによる残土運搬問題を回避すると称して、近隣の谷への埋め立てを提案する非常識な対応をとっている。

●豊丘村の小園地区も上流二つの谷に約 50 万㎥の残土を盛土する予定であった。この地は三六災害でも被害を受けた地域であったにもかかわらず、地元にはほとんどその計画が明らかにされず、本年の 1 月 18、19 日になって突然埋め立て概要説明会が JR によって行われた。

●筆者は「豊丘村リニアを心配する会」の呼びかけがあった昨年 12 月 6 日に第 1 回の勉強会をに出席し、村内 3 箇所の残土処分候補地の中でも特に小園地区の谷埋め盛土は決して許してはならないと強く訴えた。

●この学習会は本年 1 月 17 日にも開催され、この時には小園地区の住民の中で関心を持った方々が参加して下さり、2 月末に地区の全戸に配布されたチラシを準備して下さっている。

●4 月 12 日に開催されたこの地区での学習会には筆者が講師として招かれた。この学習会には 50 名が参加（地区の住民 560 名）地権者を含めた多数が谷埋め盛土に反対の意向を表明した。

●4 月 14 日「リニア残土 NO！小園の会」が発足。署名を開始して 10 日間で下流域住民の約 70％を集めて、村長と JR 東海に申し入れた。地域住民からは「家族で話し合った」、「熟慮した」、「雨が降るたびにこれ以上不安になるのは御免だ」等、真剣な声が聞かれた。

●ＪＲ東海は「なぜ反対されるのかわからない」などと言いながら裏では切り崩し工作をはじめていたが、住民の固い結束を見て 6 月 8 日、「地権者の同意が得られない」としてこの地での計画を断念すると発表。「村からの中止要請とは全く関係ない」と強弁。

●筆者は 3 回の学習会で以下の内容で地域住民への説明と警告をくり返し行った。

・筆者の話は「リニアへの賛否」とは関係なく、谷埋め盛土の危険性についてのみ説明した。

・谷埋め盛土の危険性は豪雨（特に全国で頻発するバックビルディング現象）による土石流災害と、大地震時の谷埋め盛土の崩壊について、過去の事例と伊那谷での問題について詳細に解説した。

・豪雨時の土石流災害については、トンネル残土が花崗岩の粉砕土砂であることを示して、過去のマサ土地帯での災害と土質工学、土木工学、などの知見を併せて説明した。特に 2014 年広島土石流災害を事例に、バックビルディング現象と三六災害との関連を示して伊那谷での土石流災害の危険性を指摘した。また、近年の降雨強度の変化についても気象庁のデータを下に、温暖化による降雨形態の変化についても強調した。

・大地震時の谷埋め盛土崩壊の危険性については、阪神淡路大震災時に発生した西宮市仁川百合野町における崩壊事例を示すとともに、京都大学防災研究所（釜井俊孝ら）の「地震による大規模宅地盛土地すべりの変動メカニズム」を参考に解説を行った。特に地山が緩傾斜の盛土であっても、地震時の崩壊事例が多いとされた解析結果は、現実の谷埋め盛土の危険性を理解する上では重要な内容であった。

・学習会の前には現地調査をくり返し、また国土地理院の地形図を基に縦横断面図を作成し、京大防災研の報告にある「地山が緩傾斜であっても崩壊する危険な勾配」の範囲にあることを具体的に説明した。

・県と JR 東海が「リニア対策委員会」などでくり返し発言してきた「県の基準に基づいて行う」「県が法令に基づいてしっかりチェックする」「工事後は地元に管理していただく」といった欺瞞的な発言内容について、盛土崩壊の危険性を除去していないことを具体的に説明した。

●3 回の学習会では「リニアの賛否に関係なく」と前置きして解説したが、そのことが住民には広く受け入れられた。村長は議会答弁で「リニア反対派が後付けで残土問題を取り上げているだけだ」と発言したが、地元からの反撃に遭って、結果的に発言を撤回した。
第 3 回学習会でも多くの出席者から「リニアには賛成だが、残土の盛土には反対だ」との意見が出た。

●地元住民が行った署名簿でも、冒頭には「リニア新幹線への期待」が語られているように、地域住民の多数の気持ちを大切にした署名簿となっていた。

●JR 東海は大鹿村での工事開始を 10 月にも開始すると述べているが、トンネル残土の処分についてはまだどこも正式に決まっておらず、このことは工事全体に与える影響は大きい。これまで地域住民を欺きながら残土処分地の候補地選びを進めてきたが、現実を目の当たりにした住民からは警戒の声が強く出始めている。

●不誠実な JR 東海の姿勢は、心ある住民やメディア関係者にも不信感を与えており、谷埋め盛土の危険性を正確に説明すれば、さらに JR 東海は窮地に追い込まれていくことになるだろう。JR 東海が「地域の理解を得たかどうかは JR が判断する」と述べているのは、窮地に追い込まれて自らの欺瞞的な態度をかなぐり捨てた姿である。

●「谷埋め盛土は必ず崩壊する。それは時間の問題だけだ」という筆者の説明は、「阿智村議会リニア対策委員会」に呼ばれた際にも繰り返し説明した。地域代表や議会が谷埋め盛土を了解するには、それなりの覚悟と将来に及ぶ責任を自らが負わねばならないことを具体的に厳しく指摘した。

●JR 東海が長野県内で計画しているリニア新幹線工事の準備過程で、部分的にでも計画を断念したのはこの豊丘村小園地区が初めてである。威圧的な県と JR の姿勢を突き破ったのは、地元住民の「谷埋め盛土で被害を受けるのはゴメンだ」という強い気持ちと団結力で

皆さんはどのような地域（村）を後世に残したいのでしょうか？
私は「住み続けられるまちづくり」をいつも地域の皆さんに訴えてきました。その核心は地域の宝物を見いだして大切にすることだと考えています。
世界に一つしかない地域の宝物をもう一度見つめてみませんか。
地域の疲弊化は高齢化するからではありません。高齢者が生き生きと暮らす地域には、必ず若い人たちも魅力を感じるでしょう。
皆さんの村の宝物は何なのでしょう？
100 年後にその宝物は誰が守っているのでしょうか。